

社会学の国際化に関する研究 (5)  
——国際化をめぐる視線と課題——

成城大学 西原和久

1. 目的

本報告の目的は、主として2016年2-3月の日本社会学会員への「社会学の国際化」調査（以下、学会員調査）に基づきつつ、同時に第18回ISA世界社会学会議での調査（以下、横浜大会調査）をも踏まえて、「国際化」をめぐる日本社会学会の学会員の視線の方向と、その視線の先に見えてくる問題点とを示しつつ、可能な限りその問題克服のための課題（の一端）を展望することにある。

2. 方法

そのためには、学会員調査のうちの、「社会学の国際化に関する意見」と「社会学の国際化の問題点」、そして「社会学の国際化の推進要因」に関する項目の回答を中心にして、横浜大会調査も射程に入れて考察を加える。なお、この考察においては、①国際化という概念の内容、および②社会学の国際化の問題点、という2つの点が中心的な検討の論点となる。

3. 結果

「社会学の国際化に関する意見」としては、学会員調査では「多様な価値観の創出」および「自国中心的思考からの脱却」という答えが目立ったが、横浜大会調査ではさらにこの2つに加えて、「欧米中心的志向からの脱却」という回答も特徴的であった。少なくとも、国際化という概念がグローバル化によって国民国家をこえる動態を指すのみならず、欧米中心のないし自国中心的思考をこえていくことをも示唆している点は、「多様な価値観の創出」の指摘とともに、たいへん興味深い点である。

さらに、「社会学の国際化の問題点」に関しては、学会員調査では①コスト問題、②言語問題、③支援不足問題の順に問題点が指摘されている（横浜大会調査では、わずかな差だが、②と③が入れ替わる）。また特に学会員調査においては、ISA横浜大会不参加者の回答でも——②言語問題と①コスト問題が接近するとはいえ——コスト問題・支援不足問題の指摘の多さを示しうる。「社会学の国際化の推進要因」として、国の「国際交流政策」や「学術政策」が、「所属機関の方針」とともに、推進要因として日本社会学会員に認識されていることと合わせて考えると、国際化の推進が国や所属機関から示されながらも、支援不足に伴うコスト問題が重要な問題点として指摘できると思われる。

4. 結論

以上の結果を踏まえて、「社会学の国際化」や「国際化」それ自体の含意とその課題とが一定程度、確認できる。今日、「世界の大学のランキング化」や「大学の国際化」に関する世間の関心の高まりといった動向と考え合わせると、「社会学の国際化」が国際社会的にみて重要な含意と課題を内包していることが浮き彫りになるように思われる。そしてその含意・課題の一つに、報告者の私見では、「何のための国際化か」という論点が存在すると思われる。本報告では、この点に関しても展望の一端として可能な限り触れてみたいと思う。